

「思い出のみかん」

上尾市立中央小学校 五年 松谷 憲志朗

ぼくは、みかんが大好きです。なぜなら、みかんはとても甘くて、少しすっぱい、ぼくはこのあまずっぱさが大好きで毎年食べています。でも、みかんが大好きな理由はもう一つあります。それは、おじいちゃんが毎年送ってくれたことです。

ぼくがまだようち園にはいつていたころの話です。ぼくはようち園の年中だったころの冬に「ピンポン」となりました。とどいただんボール箱をあげると、たくさんのみかんが入っていました。とても良い香りでした。これはおじいちゃんがとどけてくれたものでした。それから何週間かして、おじいちゃんがすんでいる大阪府へ旅行に行きました。大阪では、おじいちゃんとごはんをたべたり、遊んだり出かけたり、たくさん一しょにいました。そして、一週間はあつという間にすぎりました。そしてまた一年がたちました。その年の冬にもみかんがとどきました。それから3年の月日がたち、ぼくは小学2年生になりました。その年の5月、おじいちゃんが病気になりました。そして、何週間がたち、おじいちゃんが死んでしまいました。ぼくはとてもかなしかったです。昔は、大阪に行きたくさん遊びました。また、いつしよに京都府にも行きました。そのたくさん遊んでくれたおじいちゃんが死んでしまうなんて、むねがつぶれてしまいそうでした。しかし、3年生になったころ、また「ピンポン」という音が部屋にひびきました。とどいたものは、おじちゃんからのみかんでした。それは、おばあちゃんがおじいちゃんの名前でとどけてくれたつまかんでした。ぼくは、死んでしまう前のおじいちゃんがおばあちゃんにお願いしたものだと信じています。そのみかんは、今でもとどいています。みかんを見るたびに、ぼくの心におじいちゃんの顔がかびます。